

「和」する家持

一

家持と女性たちとの間で円満に交わされたはずの贈答が萬葉集に多く一方を欠いて記録されることはよく知られている。その事情はもとより不明とするほかない。ところが巻八秋雜歌には他者の詠に積極的に和する家持があらわれる。次のA〜Cがそれである。

A 衛門大尉大伴宿祢稻公歌一首

鍾札能雨 無間零者 三笠山 木末歴 色附尔家里

(8・二五五三)

しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色付きにけり

大伴家持和歌一首

皇之 御笠乃山能 秋黄葉 今日之鍾札尔 散香過奈牟

(8・二五五四)

大君の三笠の山のもみち葉は今日のしぐれに散りか過ぎなむ⁽¹⁾

B 巫部麻蘇娘子鴈歌一首

誰聞都 從此間鳴渡 鴈鳴乃 孀呼音乃 之知左守

(8・二五六二)

誰聞きつこゆ鳴き渡る雁がねのつま呼ぶ声の之知左守

影 山 尚 之

大伴家持和歌一首

聞津哉登 妹之間勢流 鴈鳴者 真毛遠 雲隠奈利

(8・二五六三)

聞きつやと妹が問はせる雁がねはまことも遠く雲隠るなり

C 日置長枝娘子歌一首

秋付者 尾花我上尔 置露乃 応消毛吾者 所念香聞

(8・二五六四)

秋付けば尾花が上に置く露の消ぬべくも我は思ほゆるかも

大伴家持和歌一首

吾屋戸乃 一村芽子乎 念兒尔 不令見殆 令散都類香聞

(8・二五六五)

我がやどの一群萩を思ふ兒に見せずほとと散らしつるかも

前稿「巻八の相聞贈答——一六三三——一六三五歌を中心に」⁽²⁾では

このことに関連して次のような見通しを示した。

歌を四季に分けるという新たな規制を与える過程で、詠歌の一次的な贈答関係が解体されやすい傾向を有するのは確実だろう。そうした必然においてあえて贈答を維持した詠歌を編集する事例には、文芸的意図の介在が避けられない。

相聞部を対象とした右の観察を雑歌部に適用するときには、少なくとも一般論としては贈答唱和関係を歌集内に維持する必然性がさらに稀薄になると見てよいはずで、巻八に限るなら贈答関係を構成する編集事例は家持関係歌に著しく偏るのであり、編集者・家持の意図的操作がそこに加わっていると予想するのは誤っていいまい。季節詠の配置ということならば、A 大伴稲公、B 巫部麻蘇娘子、C 日置長枝娘子の各歌を単独で位置せしめることに特段の不具合はなかったし、現にBは「巫部麻蘇娘子鷹歌」と題されてすでに編集を完了しているにもかかわらずあえて「和歌」を連れ立たせたのは、人間関係の記録のみを意図した営みとも思われない。やはり、贈答関係で成り立つ歌の世界、すなわち立体的な対話のおもしろさがねらわれているのであろう。

以下、おのおのについて、そうした観点から検討してみたい。なお、萬葉集歌の本文には塙書房刊CD・ROM版を使用するが、必要に応じて改めたところがある。

二

大伴稲公は家持にとっては叔父にあたる人、巻四・五六七歌左注に天平二年六月時点の稲公の官職を右兵庫助（正六位下相当）とし、続日本紀天平十三年十二月丙戌条に従五位下因幡守任用が記されるため稲公の衛門大尉在任期間はその間に想定され、一五六六・一五六九歌左注に「天平八年丙子秋九月作」とあるによりAの詠作時期を天平八年以前に限定できる。さらに一五四九歌題詞「典鑄正紀朝臣鹿人至衛門大尉大伴宿祢稲公跡見庄作歌」の情報と巻六・天

平五年の位置に配された「紀朝臣鹿人跡見茂岡之松樹歌」（九九〇）、「同鹿人至泊瀬河邊作歌」（九九一）とを勘案するに、一五四九歌詠作時が天平五年であった可能性は小さくないから、当面の唱和が交わされた時期も自ずから特定されてこよう。仮に天平五年とすれば家持十六歳のころ、ちょうど「初月歌」（六・九九四）を試み良家子女との相聞往来が盛んになる前後だ。

稲公歌は降りしきるしぐれが三笠山の木々を色づかせたと感嘆してみせ、和する家持歌は今日のしぐれで三笠山の黄葉がすべて散り過ぎるのではないかと懸念するものである。両歌の発想は対照的ながら、ともに背後に豊富な類歌が控え、黄葉の盛りを賞美する典型におさまるところから、これまで注目度は低かった。たとえば「萬葉集私注」は稲公歌に対して「平板な歌であるが、一通り歌ひ得て居る」と言い、家持歌には「これも一通りの歌にすぎない」と淡泊な感想を書き付けるのみである。

周知のとおり、しぐれは平安和歌にあつてはおおむね冬の景に定着し、

神無月降りみ降らずみ定めなきしぐれぞ冬のはじめなりける

（後撰冬四四五 よみ人しらず）

神無月しぐれとともにかみなびの森の木は葉は降りてこそ降れ

（同冬四五一 よみ人しらず）

のように詠まれるのを常態とするが、萬葉集では後期に至つてようやく歌ことばの地位を獲得するため、季と景との固定化が未成熟であり、集中二十三例のうち黄葉と共に起する例が半数を超えるものの、秋と冬に跨がつてしぐれを認知した⁽⁴⁾。

：ほととぎす 鳴く五月には あやめ草 花橘を 玉に貫き

縷にせむと 九月の しぐれの時は もみち葉を 折りかざさむと… (3・四二三 山前王)

九月のしぐれの雨に濡れ通り春日の山は色付きにけり

(10・二一八〇 秋雑歌 詠黄葉)

十月しぐれにあへるもみち葉の吹かば散りなむ風のまにまに

(8・一五九〇 秋雑歌 大伴池主)

十月しぐれの常か我が背子がやどのもみち葉散りぬべく見ゆ

(19・四二五九 大伴家持 天平勝宝三年十月二十二日)

右によるかぎり、秋のしぐれは木の葉を色づける気象、冬のしぐれは黄葉を散らす存在と見なされている。天平十年十月十七日の日付をもつ「橘朝臣奈良麻呂結集宴歌十一首」(8・一五八一—一五九一)に、

もみち葉を散らすしぐれに濡れて来て君が黄葉をかざしつるかも

(8・一五八三 久米女王)

など黄葉を散らすしぐれを多数含むのはその点から頷かれる。

このように見れば、しぐれの機能を対照的に描く両歌が唱和関係を作り立たせること自体にいささか不審が生じる。そこに着目してか窪田空穂『萬葉集評釈』は「和ふる歌」とは云ふが、前の歌とは繋がりのない程のものである」とし、岩波新日本古典文学大系『萬葉集』にも「前歌と同日の作とは考えにくい」の注が施される。ただし、追和などの詠作事情を想定して矛盾回避を図るのは当たるまい。⁽⁵⁾一見矛盾を孕むかのごとき二首を組み合わせている様態の意図をそのままに汲みとるべきである。

しぐれが木の葉の色づきを促すという趣向は、ふつう次のように実践される。

我がやどの浅茅色付く吉隠の夏身の上にしぐれ降るらし (10・二二〇七)

夕されば雁の越え行く龍田山しぐれに競ひ色付きにけり

(10・二二一四)

いま右を標準とすると、稲公歌はこれらとはかなりの距離があることが知れる。すなわち、当該歌は間断なく降るしぐれが三笠山全山の木々の梢までもことごとく色づかせた、と驚いてみせるのだから、そこに顕著な誇張が巧まれているのである。同趣の誇張は次の一首にも看取できる。⁽⁶⁾

しぐれの雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色付きにけり

(10・二二九六 秋雑歌「詠黄葉」)

色づくはずのない真木(常緑樹)の葉までが紅葉したと誇張する目的は、それほどに山の全体が美麗であることの讃歎にあるう。稲公が右を踏まえたかどうかは判断できないが、類想の例をほかに探し当てることはできない。額田王が「青きをば置きてそ嘆く」(1・一六)とうたったごとく秋山には色づくことない常緑の葉の混じるのが自然であるところ、「木末あまねく」色づいている三笠山は、まさにこの世のものならぬ最高の美を現出している。稲公はそう大袈裟に言って反応を誘うのである。

家持和歌は、提示された絢爛の三笠山を「大君の御笠」と受け止め、玉座を飾る天蓋に見立てることで応じる。かかる超現実的な美の極致であるならばそれは単なる自然ではなくて大君の所有に帰する至宝にちがいないという、即妙の機知だ。⁽⁸⁾山名から人工物への連想については新大系が稲公歌について「三笠山」の山名には、しぐれの雨には笠を着るという連想がある」と注するが、その着想はむ

しろ家持和歌に鮮やかな意匠として展開されている。

さらに同歌は「今日」のしづれが黄葉を散らしてしまおうのではないかと懸念してみせる。一首の枠組だけをとれば、

明日香川行き回る岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ

(8・一五五七 秋雑歌 丹比国人)

に似通うといえるものの、右はせっかくの盛りの黄葉が散り過ぎるのを惜しむという規格どおりであるのに対し、家持歌は、いま「木末あまねく」色づけたばかりのしづれが直ちに木の葉を散らしかねない和大仰に案じているわけで、尋常ならざる威力を発揮したしづれに畏怖の念を向けるかのごとくにうたっている。晩秋にしづれが色づかせた葉を同じ日のしづれが散らすなど、あろうはずのない誇張を家持が試みるのは、いうまでもなく稲公歌の非現実的誇張に誘発されてのことだ。

「今日」を境として黄葉が散るとの懸念は、とりもなおさず「今日」が絶頂の日であることの確認でもある。両者の応答の実態はどうあれ、「和歌」と記された以上は家持歌の「今日」は稲公歌と同日でなければならぬので、かくして三笠山の最高的一天が描出される次第となる。「今日」を理想の時間とする言挙げは萬葉末期家持周辺に加速度的に増加する。

霞立つ春の初めを今日のごと見むと思へば楽しと思ふ

(20・四三〇〇 大伴池主)

初春の初子の今日の玉簪手に取るからに揺らく玉の緒

(20・四四九三 大伴家持)

鴛鴦の住む君がこの山斎今日見ればあしびの花も咲きにけるかも

(20・四五一 三形王)

単独で眺めるときには「一通り」「平板」の評価を払拭しにくい各歌が、こうして唱和を構成したことにより、かけがえのない黄金色の秋の日を記録しえた。家持和歌が番えられなかったとしたら、稲公歌の誇張はおそらく宙に浮くしかなかったであろう。

三

Bの巫部麻蘇娘子の素性は女官であろうか、巻四にも「巫部麻蘇娘子歌二首」が見え(七〇三、七〇四)、前後に家持関係歌が配されるので、「贈」字はないものの家持に届けた確率が高い。家持からの和歌はそちらには載らない。

前記したとおり、巫部麻蘇娘子歌には「鴈歌一首」と歌題が記される。巻八雑歌中に「大伴宿祢三林梅歌一首」(一四三四)「舍人娘子雪歌一首」(一六三六)のごとくに題を付した詠歌が「和歌」を後置させる例は確認できない。その異例をどう理解するかについては二つの方向がありえよう。

1 巫部麻蘇娘子一五六二歌一首で自立していたところへ家持和歌を追補した

2 家持和歌を含む唱和二首を「鴈歌」の題によって一括提示したA・Cの場合と同様に1の可能性を否定しきれないけれども、それは論証不能であるとともに建設性の低い想定であり、こちらでもまた論証できることではないが、小稿は2の見通しに立っておきたい。

もともと、一五六二歌は第五句の本文に疑義があつて訓が定まらない。冒頭掲出の本文は類聚古集・紀州本・西本願寺本等によるもので、大矢本などいくつかの本は「守」字を「寸」につくる。文字

に即して訓もうとすれば旧訓ユクヲシラサズもしくは『萬葉代匠記』によるユクヘシラサズが考慮しうる限界だが、「之」をユクに充てる例、「守」「寸」をズの仮名に使用する例ともに集中に見ず、シラサズでは歌意も滑らかでない。そこで、『萬葉集略解』が「宣長云、乏蜘蛛可と有しが誤れるならん。ともしくもあるかと訓べし」とし、さらにそれを承けて『定本萬葉集』別記に「守は寧、乎の誤であつて、トモシクモアルヲと讀むべきもの」と推定したところが現在比較的広く支持される。しかしながら、字形（草体字形）の類似や省画はそれなりに承認できるとしても、

之知左守 — 乏蜘蛛在乎

と一句すべての文字を変更しなければならぬ点に抵抗感を拭きたい。しばらく保留とするほかないだろう。

ところで井手至氏『萬葉集全注巻第八』は娘子歌について、

自分（作者）に声もかけてくれない相手の男にあてこすりを言うため、空を渡る雁を持ち出したものか。

の推測を記し、家持和歌については、

前歌を承けて同一の素材を詠み込みながら、雁はすでに遠く飛び去ったとして、娘子の問いかけをはぐらかした歌。

のように解を定めたうえで、両者の唱和を総括して、

雑歌に入っているが、この両首は、次の一五六四・一五六五とともに相聞歌と見てよいものである。

という。内容的に相聞と同質であるとする認識は多くの注釈書に共通し、娘子歌にある種の怨情を、家持歌にそれを受け流す呼吸を指摘するものも少なくない。『萬葉集釈注』もその類で、

初句に、あなたは聞かれたはずだという意をこめつつ、雁は妻

を呼ぶのに、あなたは私を呼んでもくれない意を封じて挑んでいる。 — 一五六二

「誰れ聞きつ」といわれるが、私の耳にも聞きにくいというわけである。したたかなはぐらかしで、家持の機智もなかなかのものである。 — 一五六三

とそれぞれを解析する。

娘子歌第五句の本文と訓を定められない段階では解釈や唱和の呼吸に踏み込まないため、右の当否に関して十分な検証を加えることもできない。だが、当面の唱和を相聞贈答と質的に往庭のないものと見なす諸見解が「鴈歌」の題意への顧慮を欠く点は不備であろう。第五句をトモシクモアルカと訓むときに妻呼ぶ雁がねへの羨望を他者に訴える趣が看取され、「誰聞きつ」とあからさまな当てこすりを向けているように見えるのは確かだが、そこを基点にして、相聞贈答にありがちなはぐらかしを家持和歌に認めるのは読み過ぎである。「鴈歌」と題されるからには秋の雁がねの情趣を切り取ったものと解するべきであり、たとえ言語表現上に男女の恋の要素が顕在しようとも、唱和の中心を恋の駆け引きとしてとらえることは正しくない。そういう意味では、『萬葉集全註釈』に「問の歌に應じて、いかにも遠く聞いたと答へたまでである」と評したのがむしろ穏やかであった。

「まことも」の口吻は家持と坂上大嬢の贈答を思い起こさせる。

玉ならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻き難し
我が思ひかくてあらずは玉にもがまことも妹が手に巻かれむを

（4・七二九 大嬢）
（4・七三〇 家持）

思考が循環し表現のもつれる大嬢歌を取りなすように矯正したのが右の家持歌である。¹⁰ 巫部麻蘇娘子歌に対して、ここでも家持は軌道修正を図ろうとしているのであろう。焦点は「雁がねのつま呼ぶ声」にある。

集中に雁がつまを呼ぶとうたう例は見いだせない。そもそも金子元臣『萬葉集評釈』が「群飛する雁の鳴くのは妻戀になくともいへまい」としたとおり、雁の生息と「つま呼ぶ声」とは整合しない。つまを呼んで鳴くのは鹿やかはづ、鶴、千鳥に託された役割であり、雁は次のようにうたわれるのが一般である。

家離り旅にしなければ秋風の寒き夕に雁鳴き渡る（7・二一六二）
今朝の朝明雁が音聞きつ春日山もみちにけらし我が心痛し（8・二五二三）

秋田刈る飯廬もいまだ壊たねば雁が音寒し霜も置きぬがに（8・二五五六）

ひさかたの雨間も置かず雲隠り鳴きそ行くなる早稲田雁がね（8・二五六六）

さ夜中と夜はふけぬらし雁がねの聞こゆる空を月渡る見ゆ（9・二七〇二）

ぬばたまの夜渡る雁はおほしく幾夜を経てか己が名を告る（10・二二三九）

鳴雁を耳にするのはしばしば明け方や夜更け、群れ飛ぶそれは雲に隠れて次第に遠ざかってゆくものであり、ときに名告り鳴くとも見立てられ、秋風・黄葉の風情とともに人は「寒し」とその声を聴いた。「雁がねはいや遠ざかる雲隠りつつ」（10・二二二八）、「天雲のよそに雁が音聞きしより」（10・二二三二）というあたりに文芸上

の雁の機能が収斂する。

「鴈歌」の題が期待させる典型を、したがって娘子歌は逸脱していることになる。詠作者はあるいは雁がねに相聞的情調を添えて提供する構想を立てたものかもしれないが、つまを呼んで群れ飛ぶ雁の像はいかにも結びにくく、そこへ「誰聞きつ」の徴発を伴わせてしまつては鳴雁の風情が減退し季節歌として破綻しかねない。家持和歌はその欠陥を矯正し先走りを抑制して、標準的な「鴈歌」に落ち着かせることを意図したのであろう。一声つまを呼ぶかにつたましく聞こえた雁がもはや遠く雲に隠れ、やがて静寂の時を取り戻せば、あとに残るのは深まる夕の暮景である。

『全歌講義』は前掲『全註釈』と同様、

娘子が雁の妻を呼ぶ声をうらやましいと詠んで、暗に家持に求愛の意を示したのに、家持は、「ともし」を、「乏しい」意に取りなして、結局は、季節の景物をめぐる歌にしてしまった。家持の歌は、単に娘子の問いかけに答えただけの歌のようである。と述べて家持和歌のふるまいに消極的評価を与えるけれども、そこそが家持のもくろむところだったのではないか。角張ったところのある娘子歌と柔和な家持歌が組み合わせられ均衡している妙を見届けた。歌題が二首を覆うと予測したのはこのゆえである。

四

いったい、詠出した歌が雑歌に収録されるか相聞に分類されるかは当人のあずかり知らぬことである。まして当面三組の場合は家持和歌の匙加減であり、先行する娘子の詠作目的がいずれにあったの

かはもはやわからない。

Cの日置長枝娘子歌も表現自体は恋歌を志向していると思われる。明らかな類歌は卷十秋相聞「寄水田」に配列される。

秋の田の穂の上に置ける白露の消ぬべくも我は思ほゆるかも

(10・二二四六)

ほかに、

我がやどの夕影草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも

(4・五九四 笠女郎)

思ひ出づる時はすべなみ佐保山に立つ雨霧の消ぬべく思ほゆ

(12・三〇三六)

夕置きて朝は消ぬる白露の消ぬべき恋も我はするかも

(12・三〇三九)

など類想の挙例は容易だ。また、『代匠記』精撰本が「秋付者ハ、此ヨリ後アマタヨメリ」と注するところ初句の表現も集中に散見し、その半数を越える四件までが家持の使用例であつてみれば、日置長枝娘子歌は既存の表現形式に拠りながら時節に適した消息を届けたということだったのではなかったか。それをもつて一首の価値を論うつもりはないが、秋の情緒を描出することに詠作者の格別な意識が働いていたとは思われない。

和する家持歌は、題材に「やどの一群萩」を選択して、それがすでに散り際を迎えていると伝える。もつともこれでは娘子歌の切実な恋情を受け流した格好であり、双方が別々の景に関心を注いでいることになるため、『全註釈』は「贈られた歌に離れて答へてある」と言い、『口訳萬葉集』に至つては「此歌は…(中略)…「我が宿の(一五七二)の歌と、入りかはつてゐるのであらう」と臆断、右

両書の見解を踏まえて『全歌講義』は、

娘子の歌が、そのまま恋情を表出した相聞歌ととれるのに、家持の「和ふる歌」は、自分の家の庭の萩の美しさを示すことが中心のようで、娘子の歌への和歌としてはふさわしくない。の評を記す。成り立っている現象はなるほどそのとおりである。

もちろん資料の錯乱を想定するべきではないから、娘子歌の示した題材と心情にあえて切り結ばない詠歌で和するのが家持の思惑であつたとしておこう。前記のとおり、娘子歌は秋の物象を詠み込んでいるとはいえその観察は浅く、心情(恋情)表出に主眼があることは明瞭だ。したがって、季節感をめぐる唱和を構成するのにこのままでは材料が十分でない。そこで家持和歌は、野の景である尾花に対する庭の景・一群萩をとり合わせ、「思ふ子」の語によつて恋歌の気分を維持しつつ、ゆく秋を惜しむ心情へと歌の中心点を移行しようとしたのであらう。その結果、「露―消ぬ」と「萩―散る」とが向かい合う情景として立ち上がり、凋落の秋にふさわしい「はかなさ」の情緒が二首に底流する次第となる。景は拡がりを得、情調はひとつに収束して、バランスのとれた唱和が成り立つのである。

家持和歌について『釈注』が指摘する、

前歌と異なり、景物への情感を表立ててうたつているところに掛け合いらしいはぐらかしを見るという鑑賞法もあるかもしれない。本物の恋歌のように符合しない点があるのはやはり見のがすべきではないであらう。

のうち「はぐらかし」の鑑賞法にはここでも与しがたいが、「本物の恋歌」らしくふるまわないところに企図がある点については、小稿もまた見のがすべきでないと思える。

恋の情趣と季節感をどのように融合させるか、こののち、やまと歌の課題になってゆく。

注

- 1 「秋黄葉」の本文に対して旧訓モミチバハとあるところ、鈴木武晴氏「大伴家持歌の『秋黄葉』——本文訓と用法をめぐって——」(『萬葉』第一五八号、平成8年7月) によってアキモミチの訓が提起され、小学館新編全集『萬葉集』や和泉書院『新校注萬葉集』など近時はこれを支持する向きが多い。なお、鈴木氏には当面の二首を扱った「大伴家持と大伴稲公——萬葉集卷八・一五五三——一五五四番歌の論」(『日本文藝論集』第二六号、平成5年9月) がある。各歌の解釈を詳細に検討したうえで唱和の呼吸を探り作歌場面や環境にも目配りした綿密な論であり、小稿との接点も小さくないが、対象への関心の所在と論の方向性が異なるため、本文中に引用することができなかった。参照願いたい。
- 2 影山尚之「巻八の相聞贈答——一六三三——一六三五歌を中心に——」(『美夫君志』第八十一号、平成22年12月)
- 3 影山尚之「跡見の岡辺のなでしこが花」(『萬葉語文研究』第10集、平成26年10月)
- 4 歌語「しぐれ」に関する基本的知見は片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院、平成11年) に拠る。ほかに芳賀紀雄氏「萬葉集における花鳥の擬人化——詠物詩との関連をめぐって——」(『萬葉集における中国文学の受容』塙書房、平成15年／初出は平成4年)、内田賢徳氏「萬葉しぐれ攷」(『上代日本語表現と訓詁』塙書房、平成平成17年／初出は平成5年)、井上さやか氏「上代語彙としての『しぐれ』」(『万葉古代学

研究所年報』第三号、平成17年3月) を参照。

5 伊藤博氏『萬葉集釈注』に次のような指摘がある。

叔父と甥の歌だから、一族の黄葉を賞でる宴席で詠んだものか。もっとも、家持のこの種の和の歌には、感興をもよおされた歌について、のちになって詠んだ場合があるので、さような用意をさしはさんでおくことも必要である。

現実の応酬のありかたは宴席・書簡ともに想定可能であり、本文三節に触れたとおり追補の可能性も否定できない。だが、いずれにせよわれわれが論議の対象にできるのは結果としての唱和のすがただけである。

6 内田賢徳氏前掲論文。

7 「大君の三笠の山」は家持の創意ではなくて巻七一・二〇二歌「大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ」の例がある。なお、鈴木武晴氏「大伴家持と大伴稲公——萬葉集卷八・一五五三——一五五四番歌の論」(前掲) は稲公歌が聖武天皇御製卷八・一五四〇歌「今朝の朝明雁が音寒く聞きしなへ野辺の浅茅そ色付きにける」を念頭に置いて詠まれたものと解し、家持当該歌が「大君の」を選択した要因にそれへの顧慮があったとする。小稿はそうした観点に立たなかったが、視野に収めてよい見解である。

8 和名抄に「華蓋 兼名苑注云 華蓋(和名岐沼加散) 黄帝征蚩尤時當帝頭上有五色雲因其形所造也」とあり、儀制令には「凡蓋 皇太子、紫表、蘇方裏。頂及四角、覆錦垂縵。…(以下略)」と皇太子以下四位に至る高位者が用いる蓋の表裏の色を定める。

9 比較的新しいテキスト・注釈類に限るなら、「乏知(蚬) 在乎」に校訂してトモシクモアルとするもの(塙補訂版、和泉新校注、新大系、岩波文庫(新) ほか)、「乏知(蚬) 在可」を採用してトモシクモアルカと

訓むもの（全歌講義ほか）、さらに「乏知（蜘蛛）在乎」によつてトモシクモアルカと訓むもの（全注、和歌大系ほか）に大別される。

影山尚之「大伴家持と坂上大嬢の贈答―卷八・一六二四―一六二六歌をめぐって―」（『萬葉和歌の表現空間』塙書房、平成21年／初出は11年）

（かげやま・ひさゆき 本学教授）